

第 37 回すまいる愛知住宅賞 総評

審査委員長 つかもとよしはる
塚本由晴

「方丈記」に学ぶ一生を編み直す小さな建築― (2121 デザインサイト) という展覧会監修者として、私はこの 1 年鴨長明とその時代に思いを巡らせてきました。長明が生きた 12 世紀後半は、末法思想の広まりや武士勢力の台頭とともに、大風、大火事、大地震、疫病が立て続けに起こり、その結果貴族たちは都を去って福原へ遷都するなど、京都を中心にした社会が揺れた時期でした。長明はそうした災害、災厄を冷静に記録し、世の無常を説きます。富や家柄を誇示するような家に興味を失い、大原に引っ越すなどしながら、家を縮めていく描写が続きます。最後は京都の巨椋池を遠望する日野山に 1 丈 (10 尺) 四方の庵を編み、必要な書画や楽器だけを身の回りにおいて、自然の中に暮らしました。800 年後の私たちにもこの随筆が響くのは、20 世紀後半に拡大した都市が、その住人である私たちの日常に気候危機をもたらし、暮らしや生き方の見直しが求められる時代だからでしょう。今年の現地審査でも、同じような意識、関心が、建築家と住まい手に共有されていました。4 畳半を縦にも横にも斜めに繋いだ、ピアノ、お茶を楽しむ女性の一人暮らし (尾張旭の住まい)、農村と緩やかに繋がる謙虚な平屋でコストを抑え、趣味のゲーム、骨董・民藝を充実させる二人暮らし (外之原の家)、旗竿敷地形状を利用して約 60m の距離と中庭を生活領域として確保した二世帯の暮らし (街区の中の家)、祖父から受け継いだ PC パネル工法の住宅を改修したポリバレント水回りの実験的な暮らし (芳野の住宅)、計画道路開通により敷地を削られ改築された築 50 年の RC 住宅を愛でながら DIY する暮らし (山山山ハウス)、伝統木造工法を広めることの先に構想される地域の製材所の再興と、山と住み手が繋がる暮らし (名古屋の石場建て、江南の家)。広さや、ハイスペックとは異なる、新しい「ゆとり」が、暮らしの想定に編み込まれた住宅ばかりです。住宅作品の潮目が本当に変わる予感がしました。受賞された皆さんのさらなる活躍に期待しています。

すまいる愛知住宅賞／愛知県知事賞 受賞作品「尾張旭の住まい」



すまいる愛知住宅賞／名古屋市長賞 受賞作品「山山山ハウス」



すまいる愛知住宅賞／住宅金融支援機構東海支店長賞 愛知県森林協会会長賞
受賞作品「江南の家」



すまいる愛知住宅賞／UR都市機構中部支社長賞 受賞作品「街区の中の家」



すまいる愛知住宅賞／愛知県住宅供給公社理事長賞 受賞作品「名古屋の石場建て」



すまいる愛知住宅賞／名古屋市住宅供給公社理事長賞 受賞作品「芳野の住宅」



佳作 受賞作品「外之原の家 ゆるやかな傾斜地に建つ」



佳作 受賞作品「魚町の店舗と住居」

